

## 報告概要

話題提供として、日本においてエコーがどのように使用されているのか、あるいはどのような位置づけなのか、マタニティ誌と産院の広報を紹介する。エコーは、身体の中を擬似的に写し出す診断と治療のための科学技術であるが、こと妊娠期に関しては、そのような医療的な道具以外の機能を果たしていることが観察される。

妊婦はエコーの写真をWEBサイトにアップしたり、胎児名をつけたり、健診に行くことを「赤ちゃんに会いに行く」と呼んだりしている。マタニティ誌は「画像の読み方」や「胎児自慢」を特集している。産院は4Dのエコーでより鮮明な胎児の画像が得られたり、その動画がプレゼントされることを広報する。医療者は「母性を育てるために」エコーの画像を妊婦に開設する。

このような現状についてフロアに紹介し、可能であれば『Babies First Picture』（赤ちゃんの初めての写真）を初めとする社会学的研究をレビューしたい。

## 既出論文・報告

2009年「生殖医療現場における科学技術と相互行為の関係について —— 産婦人科診察室における超音波画像診断装置を焦点に」『保健医療社会学論集』68-81

2007年11月「生殖医療現場における妊婦と空間およびエージェンシーの相互作用 —— 産婦人科外来・助産科外来診察室を事例に」第80回日本社会学会大会・自由報告、於関東学院大学

2008年11月「内診台をめぐる一考察 産婦人科診察室の内診台上のカーテンと相互行為の関わりを中心に」第81回日本社会学会大会自由報告